

環境文学として読む宮沢賢治の童話：『注文の多い料理店』から「よだかの星」へのエコロジー思想の展開

松原，留美
近畿大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/2557088>

出版情報：Comparatio. 23, pp.1-12, 2019-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



環境文学として読む宮沢賢治の童話

—『注文の多い料理店』から—

「よだかの星」へのエコロジー思想の展開

松原留美

序 エコクリティシズム「第二派」の環境文学と賢治作品

二十世紀後半に、アメリカ合衆国で「エコクリティシズム」(Eco-criticism)が確立した(一)。エコクリティシズムでは、地球環境の破壊に関する危機意識を背景にして書かれ、また生態系全体に対する思想(エコロジー思想)を含む作品全般を扱う。この批評体系が確立した当時は、ヘンリー・ソー(Henry David Thoreau, 1817-1862)の『森の生活』(Walden; or, Life in the Woods, 1854)を金字塔とし、直接的に自然について記録されたネイチャーライティング(Nature Writing)と呼べるものを主軸としていた。当初は主に、「原生自然」を賛美し、その対極にある文化を否定する傾向の批評が多かった。ローレンス・ビュエル(Lawrence Buell)は、このような従来のエコクリティシズムを「第一波」とし、それに対する「第二波」は、『自然的なもの』のみの領域を超えて環境の概念を拡張しているという。ビュエルは「文学や歴史において『自然的な』そして『社会的な』環境がいかにお互いに影響を与えあっているか」に注目すること、また「人間の最も本質的な欲求のみならず、それらの要求とは無関係な地球と地球上の人間以外の生物の状況と

運命にも人間が対応すること」が重要であると訴えている(二)。

現在、エコクリティシズムは、人間中心的な世界観を批判し、自然環境と人間の対話や交流、共生を主なテーマとするノンフィクション、詩、小説、エッセイ、演劇など、自然が大きく取り上げられるすべての文学を含む(三)。そして、これらの全てのジャンルは、「環境文学」(environmental literature' environmental writing)と表現されるようになったのである。エコクリティシズムの移行によって、自然について書かれた世界の様々な文学作品が見直されてきた。宮沢賢治(明治二十九年―昭和八年)の作品もその一つである(四)。

賢治は周知のとおり、科学の研究者であり、農学校では肥料の開発を担当する教師であった。そして、熱心な法華経の信者であった。法華経徒として、賢治の理想主義は単に空想に留まらず、科学を踏まえた実践を行った。また、賢治の作品の中には、環境破壊への危機意識をもった書かれたものが多くある。中でも、童話集『注文の多い料理店』は、人間を自然の一部と見なし、いかに人間が自然と共生していけるかを暗示している作品群である。この作品集に収められた「どんぐりと山猫」、「狼森と笹森、盗森」、「注文の多い料理店」など九篇の童話には、人間が自然の中に入って行って、「原生自然」に出会う姿が描かれている。

賢治の作品として挙げられるのは、童話を始め、多くの詩篇や短歌である。そして、賢治作品の多岐にわたり共通しているのが、法華経の世界観をとおして見た自然の描写方法である。しかし、賢治の作品を、自然について描いた環境文学と見なしながら、法華経か

らの影響については、まだ十分に研究がなされていない。そこで本稿では、特に、①法華經の「一念三千」が賢治の童話に影響していること、また、②「一念三千」の観点が、『注文の多い料理店』と作品群と同時期に書かれた童話「よだかの星」においてエコロジカルな視点を深めていることに注目した。

一・浄土真宗から法華經への転向と動植物のモチーフ

賢治は、厳格で、信仰心が強く、浄土真宗の門徒である父の影響の下、仏教的な雰囲気濃い家庭環境に育った。一八歳の頃、肥厚性鼻炎手術のために入院せざるをえず高等学校への進学を断念した際に、北山の願教寺の島地大等の『漢和対照 妙法法華經』を読んだ。釈迦が出世の本意を説いたこの經典について、「只歓喜し身ふるひけり」^(五)と後に述懐しているほど、当時、この書に大きな衝撃を受けた。そして賢治は、生涯をかけて終始信心することを誓い、浄土真宗から法華經に転向し、「一心に仏を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜しまない」^(六)と当時の心境を述べた。

法華經の教えは、内田朝雄によると、『利他の視野』を発見した自由^(七)であったという。これは、萩原昌好が解説するように浄土真宗の「ひたすら自己を捨て、その捨てることをも捨てる、といった親鸞の教義と、自己を無限に拡大して、更に自己に至るといった日蓮（法華經）の教義との差異である」ということであり^(八)、つまり前者の「他力本願」と、後者の「自力本願」といった差異によって、賢治が何かから解放され、自由を発見したということである。

法華經の教義が意味するのは、父の呪縛から解放されるということであったかもしれない。

賢治は大正九年一二月、国柱会へ入信するに至り、その次の年には家出同然で上京し、実際に国柱会の主宰である田中智学のもとで法華經の実践を試みようとした。その理由は、田中智学の『日蓮主義教学大観』に魅かれたからであった。同書には「一念三千」という仏の理念が説かれていたことが、その主な理由である。「一念三千」とは、齊藤文一によると、「一念の心に三千の諸法を具するということ」で^(九)、賢治は「一念三千」という考え方に深く感銘を受けたのである。齊藤は、同書中の「開目抄」の章から次の箇所を引用している。

此等（爾然）の経々に二つの失あり、一には行布を存する故に、仍まだ權を開せず、迹門の一念三千をかくせり、二には始成を言ふ故に、未だ曾て迹を發せず、本門の久遠をかくせり、此等の二の大法は、一代の綱骨、一切經の心髓なり、迹門方便品は、一念三千二乗作仏を説く、爾然二種の矢一つ脱たり、しかりといへども、いまだ發迹顯本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏もさだまらず、水中の月を見るがごとし、根なし艸の波上に浮るにいたり、本門にいたりて始成正覺をやぶれば、四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾然迹門の十界の因果を打やぶつて、本門の十界の因果をときあらはす、此即ち本因本果の法門なり、九界の無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備りて、眞の十界互具百界千如一

念三千なるべし 「開目抄」(十)

ここでは、「一念三千」と「久遠実成」の二大法門が、「一代の綱骨、一切経の心髄」であり、釈迦が菩提樹のもとで開目する以前、即ち無限久遠のはじめから本仏は実現していたということが説明されている。つまり、「開目抄」では、釈迦の説教として説かれた四経(藏、通、別、円)は否定され(十一)、本門の十界の因果があらわれ出たというのである(十二)。齊藤は「開目抄」には、「迹門の觀念では仏の本体をあかすことは出来ず、本門寿量品によつて久遠実成の本体をあらわすことになるということが強調されている」(十三)と述べている。賢治は、浄土真宗にはない、姿を捉えにくい仏について書かれたこの經典に衝撃を受けたと考えられる。

この時期、賢治は保坂嘉内宛の書簡に次のように書いている。

今度私は国柱会信行部へ入信しました。即ち最早私の身命は日蓮聖人のです。従つて今や私は田中智学先生の御命令の中に丈あるのです。謹んで此事を御知らせ致し 恭しくあなたの御帰正を祈ります。(十四)

この書簡には、田中智学の教えに一心に入念しようとする賢治の強い決意がみられる。そしてその改宗後、賢治は、法華経の教義を反映させて、生物と宇宙(自然を含む)の関係を童話の中に語り始めたのである。

前述の「久遠実在の本体」を、賢治はまず、宇宙の一つの永遠の

大生命であると解釈した。恩田逸夫は、世界全体を包括するこの大生命体を、賢治のいう「まこと」とであると解している(十五)。恩田は、先行研究では充分に扱われていなかった賢治の初期の童話「めくらぶだうと虹」に注目し、ここではじめて「まこと」という言葉が法華経の理念として使われていることに注目している。

その「まこと」について、「めくらぶだうと虹」では、めくらぶだうが自分のみじめな姿と虹の美を比べ、価値のない命であると述べたことに対して、虹の言葉で以下のように語られる。

もしも、まことのちからが、これらの中にあらわれるときは、すべてのおとろへるもの、しわむもの、さだめのないもの、はかないもの、みなかぎりないのちです。わたくしでさへ、たゞ三秒ひらめくときも、半時空にかかるときもいつもおんなじよるこびです。(十六)

このように虹は、「たゞ三秒」の命でも、「まことのちから」があらわれていれば、生きることは喜びであると答える。ここで虹は、生きている時間がほんの一瞬であっても、仏の光を受けている命は全て尊く、生きていることが美そのものであると述べていると解することが出来る。これはぶどうに限らず、全ての生き物に言えることで、命に優劣はないということである。また、虹が、光がなければ輝くことはできないように、仏の光を受けてこそ命は輝くということが暗示されている。賢治が目指している頂点は、仏の光であつて、それは時間的な概念を超えて、生きているものを最大限に輝かせる

ことができるものなのである。

また恩田は、『まこと』が現われるとき、各々はその所を得て、正常で幸福な営みがおこなわれ、『まこと』が失われるとき、人間は『修羅』となって苦悩するのである^(十七)と解説している。賢治は、『開目抄』にあるような仏の「まこと」の姿は捉えにくく、また到達しにくいものであるが、個人個人が幸福に生きるためには、この「まこと」を追ひ求め続けなければならない、また、この「まこと」を失わないように努力しなければならないと考えたと言えるだろう。このような経緯で、賢治は「法華経」を読み、鍛錬を積み、自己と他人の「まこと」の成就のために尽力し、その一環として童話を書いたのである。

二、『注文の多い料理店』の動物の力

周知のとおり、賢治は、故郷、岩手県で生涯のほとんどの時間を過ごし、農業に携わり、自然の事物を題材にして多くの作品を書いている。賢治の作品には、岩手の山や野原を舞台にして、人間が動物や鉱物と交流する物語が繰り広げられている。これらの多くの作品に登場する動植物や鉱物の数をあげてみると、総数は数百種にものぼる。渡邊貞一郎は、賢治の童話に登場する動物の種類と総数を、「哺乳類三十三種、鳥類に二十六種など総数百二十七種に及ぶ^(十八)」と述べている。植物について、伊藤光弥は次のように述べている。

賢治の作品に出てくる野草の総数は百種を超えるものと思われる。すでに挙げた樹木や農作物や草花などの種類をくわえると、童話も含めた作品に登場する総数は二百五十種をはるかに越えることになる。これは賢治の植物学の知識がいかに豊富であったかを裏付けるとともに、作品の多くが賢治をとりまく自然や風土から生まれたことの証でもある。^(十九)

このように、作品に登場する動植物の数は、そのまま賢治の博物学の知識の豊富さを物語っているとと言えるだろう。

賢治が生きた時代の日本の自然環境であるが、明治時代までに日本は西欧文明を急速に取り入れ、近代産業の発展のために、木材を大量に利用した。その用途は、主に、建築用、工事の足場や杭、鉱山の坑木、電柱、鉄道の枕木、貨物の梱包、造船材料、棧橋、そしてパルプの原料など様々なものであった。このため、森林の荒廃が深刻化していたのである^(二十)。禿げ山は台風被害を拡大し洪水を引き起こしたため、伐採と同時に、植林も並行して行われた。一八九七年に制定された「森林法」では、森林の伐採が本格的に規制されるようになり、国有林は、一八九九年から一九二二年までの「国有林野特別経営事業」により、林野を払い下げた費用を投じて無立木地帯には積極的に植林が進められ、公有林では、大正九年から「公有林野官行造林事業」によって森林整備が実施された。しかしそれでも尚かつ、民有林では約一二〇万ヘクタール、国有林では約三〇万ヘクタールの造林未済地があった^(二十一)。賢治が住む岩手でも、森林保護は喫緊の問題であった。特に、日清・日露戦争後、経済の

成長とともに森林伐採が進み、環境問題がさらに多極化して差し迫った問題となる中で、環境保護の緊急性を見抜いた賢治の表現は、童話「グスコブドリの伝記」にみられる。一八九〇年に世界で初めて地球を温める物質が二酸化炭素であると発表され、一九二一年に賢治はこの童話を書いているが、その後温暖化が地球の存続を決定する事態となることを賢治はこの童話を通して警告しているのかのようである。

賢治は、童話の中に描いている奥山、つまり「原生自然」をどう理解していたのだろうか。グレゴリー・ガリー (Gregory Golley) の研究では、賢治にとって「原生自然」の世界は、「人間の耕作圏と相互浸食し、相互作用を及ぼし合い、しばしば争う」^(二二) 場所であると解説されている。また、人間は、この世界を倫理によって守る義務があり、また賢治の人間観においては、人間はこの世界に精神的に依存しているという^(二三)。賢治にとって、「原生自然」は、恐ろしい自然、もしくは野蛮で不毛な性質のものも含めて、人間の世界と互いに相互作用を及ぼし合うもの、不可欠なものなのである。なぜなら、賢治自身に、自分は自然の一部であるという認識があり^(二四)、彼の童話の中の人間の言葉で語る自然は、人間と「原生自然」との間の「深い繋がり」^(二五)を示唆しているからである。

このような「原生自然」に対する人間側の倫理的義務と精神的依存が示されているのは、童話集『注文の多い料理店』の「狼森と笹森、盗森」である。そこでここでは、この物語の中に表わされた、「時には恐ろしい自然」への親密感について述べていく。

「狼森と笹森、盗森」は、森が語った物語である。人間があらわ

れるよりも遙か昔、噴火によってできた四つの山に、後からあらわれた人間が謙虚に森に対峙することで、森と人との調和が保たれている話である。例えば、百姓たちが森を開墾する時には、森に断つてから行うのである。百姓たちは森に、「こゝへ畑起こしてもいゝかあ。」^(二六)と高く叫ぶと、「いゝぞお。」と森は一斉に答える。百姓と家族たちは一生懸命働き、その代償に森は冬の間も北からの風を防いでくれるのだった。次の年には、子どもも増え、小屋も増えていった。ある日、子どもたちが何者かに連れ去られたことを知ると、百姓たちは狼森へ探しに出かける。森では狼たちが、火のまわりで、子どもたちを木の実やキノコでもてなしていたが、百姓たちが近づくとは火は消え、狼たちは森の奥へと逃げていく。そして、狼が「悪く思はないで呉ろ。栗だのきのこだの、うんとご馳走したぞ。」^(二七)と叫ぶのが聞こえる。百姓たちは子どもたちと家へ帰り、栗餅をつくつてもう一度森へ行き、お礼にそれを置いてくるのだった。これは自然に神性をみて感謝するという姿勢である。自然の事物に神的なものを感じ、感謝をする心で森に入るといふ習慣的な行為が、自然との調和という、最も幸福な状態を作ることができることを暗示しているのである。

この童話に関して注目すべきことは、森という「原生自然」と共存するための知恵について触れていることである。森の生き物たちが百姓たちにするのは悪戯である。それでも、百姓たちは丁寧にそれらと会話し、必ずお礼をする。山男はとくに悪戯がひどく、百姓たちの道具を隠し、子どもたちに大きな口をあけてバアと驚かせることもある。「黄金色の目をした、顔がまつかな」^(二八) 山男で、

見た目も恐ろしい生き物である。しかし物語の後半で、親たちは、子どもたちに悪戯をした狼たちにお礼をするのである。つまり、人間がまず自然を敬い、許容し合おうとする姿勢を取ることで「原生自然」との関係性が保たれるというのである。「恐ろしい自然」を他の者として外部化し避けるのではなく、受容し、共存しようとする人間側の努力が、結局は人間に幸福をもたらすということが暗示されているのである。このように、「狼森と笹森、盗森」には、賢治のエコロジカルな思想が判り易く織り込まれている。また、このような「共存」という意識は、法華経の観点から見れば、大生命体の「まこと」の光が、全ての生き物に降り注いでいるという意識から生まれてきたものであると考えることができるだろう。

さらに、前述のように、賢治の作品には、多くの動物が登場するが、動物をどのように描き出しているかは作品によって異なっている。一つ一つを見てみると、賢治が本能的な動物の性質についてどう考えていたかを読み取ることができる。

例えば、童話「注文の多い料理店」では、特に「原生自然」の残酷さを描き出している。この作品は、料理店で山猫が人間を食べるという逆説的なストーリーになっているのは有名であるが、このような逆説において、賢治が語ろうとしたことは、「恐ろしい自然」に大きく関わっているのである。つまり、この物語が、人間が野生動物を殺して食べるということを問題視した物語だとするならば、人間は、それらの動物に対してどのように関わるべきなのかということとを寓意した物語であると考えられるのである。

賢治は、このような残酷な側面も、人間とは無関係のものではな

いということを常に意識していた。賢治が愛読した、丘浅次郎の『進化論講和』の第七章「生存競争」には、「異種間の競争」という項があり、そこには次のように書かれている。

栄枯盛衰は人の身の上ばかりではなく、動植物の各種も、異種間の競争の激しい結果、盛衰の運命は到底免れず、負けたものは衰へ、衰への極に直すれば終に亡び失せて、跡をも止ぬ様になって仕舞ふ。(二十九)

丘が述べたこのような栄枯盛衰に関する一節に、賢治は共感するところがあったと考えられる。仏の世界の中では、動物も人間も同じ立場であり、命の重さに変わりはないからである。賢治は、野生動物と同じ運命の中で共存していると考えていたからこそ、時には、「注文の多い料理店」の山猫のような残酷な動物の立場から語るのだ。

さらに、賢治の菜食主義についてはよく知られているが、それは、仏教徒として殺生を禁じられるが故の行動であつたと考えられる。この行為は、彼の信仰心の篤さを示すものであろう。そのような仏教の教えから学んで、「注文の多い料理店」では、肉食をするという行為を戒めるために、人間ではなく山猫の側から語っているとも考えられる。これは、人間の奢りに対して報復する物語を語っているとも言えるだろう。

このような宗教的な意味合いだけに留まらず、生態系のエネルギー交換の観点から見ると、野生動物に人間が食べられることも可能

性としては十分にあり得る。賢治はこの作品の中で、仏教的な戒めと、生態系のエネルギー交換^(三十一)、つまり食うか食われるかという食物連鎖のリアリティの両方を描き出そうとしているのだ。

賢治は、童話集『注文の多い料理店』において、上のような「原生自然」と人間の物語を多く書いている。「原生自然」と人間の関係を物語ることが、人間にとって何かのためになるだろうと感じて書いているのである。童話集の「序文」に次のように記していることから賢治がこの童話集に意図したことを慮ることができる。

これらのなかには、あなたのためになるところもあるでせうし、ただそれつきりのところもあるでせうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのかわらないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。けれども、わたくしは、これらのちひさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。(三十一)

このように賢治は、「わけのわからない」ことを書き留めているに過ぎないのである。賢治はこの童話集の一つ一つの話を「ちひさなものがたりの幾きれ」と呼び、それが誰かの「すきとほつたとほめいなたべもの」となるために、人間を食べてしまう「原生自然」の恐ろしさも、童話「なめとこ山の熊」の熊たちのように、時には人間を理解しようとする側面も、全てを含めて描き出そうとしているの

である。

このように賢治は、科学的知識と宗教的情操を融合させて、自然の動植物を表わそうとしていた。

三・「よだかの星」のエコセントリックな視線

二五歳の時に、賢治は童話「よだかの星」を執筆した。前章の「注文の多い料理店」では、食物連鎖のありのままの様相を描き出していたが、「よだかの星」では、「よだか」は、食物連鎖の中で、望みもせずに羽虫を食べなければならない運命から逃れようとしていた。「注文の多い料理店」と「よだかの星」における食欲という問題の扱い方が違っているのは、前者においては、人間も生態系の一部に過ぎないという概念があつたが、後者では、生態系のヒエラルキーを超越する可能性が、法華經の教えの中にあると賢治が考えていたからである。

「よだかの星」では、動物の各「種」の囲いを飛び越え、偏見や功利主義が充満する社会を脱し、仏の光に照らされる存在になることが理想とされている。そのような理想的な結果に導かれるかどうかは、種族の中の個々の性質が、仏に届く高尚なものかどうかということにかかっているのである。

「よだかの星」の「よだか」について、このキャラクターには、賢治自身に起こる理不尽を受け止めきれない自らを死によつて解決している、と下記に述べる見田宗介のように、多くの論者が指摘するが、果たしてこの解釈は妥当であろうか。確かに、この頃賢治は

思想形成の過渡期にあり、精神の未熟さは否定できず、理不尽の世界から死によって脱出し仏の世界へ行くという願望があらわれていると解されても否めない。しかし、この自問自答の最中に、「自利」から「利他」へ移行しつつあった賢治を読み取ることができることは一考に値する。法華経の「利他」の精神を温めつつあった賢治が、ここで自己が終始苦悶していた自身の心奥にある「修羅意識」^(三十三)との戦いを描いているように取れるのだ。それは、ひとつは「よだか」が鳥であるのに、まるで爬虫類のような顔をしている、といった表現にある。つまり、賢治が、大塚常樹がいうように、ベルクソンの『進化論』に影響を受けているとするならば、爬虫類から鳥類への進化の過程にある生物を主人公とすることで、修羅から人間への階級の上昇、それに至るための戦いの必要性を描き出していると言えるからだ^(三十三)。その戦いは、自己の幸福のみならず、身をもって他の幸福を叶えようという境地に立ち、自己を犠牲にする勇氣を持つために自己と戦うというものである。つまりそれは、「自利」から「利他」に至るための、自己との戦いである。

そこで、「よだか」についての詳細であるが、その姿が醜いものであることから物語は始まっている。「よだか」は鳥の仲間の面汚しだと非難され、みんなから仲間はずれにされている。「よだか」は、身体も弱く、一間も歩けない程よぼよぼである。鋭い爪もなく、どの鳥の仲間も「よだか」を恐れることはない。それでも、「よだか」は、実は、美しい川せみと宝石のようなはちすずめの兄で、巣から落ちためじろの赤ん坊を巣へ連れていくような優しい性格である。

ある日、よく似た名前の鷹からは名前を改名するように迫られる。

数日内に鳥の仲間へ改名を告げて回ることをしなければ、つかみ殺すと脅される。その時、自分も羽虫をたくさん食べて生きていることを思い出し、次の台詞をいう。

あゝ、かぶとむしや、たくさん羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのたゞ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。

あゝ、つらい、つらい。

僕はもう虫をたべないで餓えて死なう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだらう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向ふに行つてしまはう。^(三十四)

「よだか」がカブトムシや羽虫を食べていたのは、自分の食欲を満たすためではなかった。ひとつには、夜、空を飛んでいるときに、大きな空いたままの醜い口に虫たちが入ってくるからであった。しかし、自分がしていることが鷹と同じレベルのことだと気づき、それを恐ろしいと感じて、もう自分は生きていくために必要な食料さえ食べないで死んでしまつてよいと思う。「よだか」がつらいのは、殺されることであるかもしれないが、殺しの連鎖から逃げ出したいと思つたからだと推測される。弱肉強食の動物のヒエラルキーをつらいつ感じ、それを放棄するために死を選ぶのである。ここには、動物のヒエラルキーを悲しみ、ヒエラルキーの枠を超えて、他の命を守ろうとする「よだか」の姿がある。

「よだか」は、死の瞬間まで、死の先にあるものがわからない恐

ろしさと戦い、最後まで希望を持つて上を向くのであった。そしてその後、「よだか」は、無我のうちに、自分が星になつていることに気づく。太陽には、ほんの一瞬だけ輝くことを希望した「よだか」であつたが、星になつたその時から、いつまでも燃え続けることとなつた。「よだか」の希望は倍増して叶えられたのである。

ここには、ある特定の命が、ヒエラルキーの枠を越え希望を叶えることができるという賢治の考えが暗示されている。そして、ここで重要であるのは、いったん地に落ちたよだかがもう一度空へとびあがり、「そののなかほどへ来て、よだかはまるで驚が熊を襲ふときするやうに、ぶるつとからだをゆすつて毛をさかだてました」^{三十五}という場面の、「よだか」の驚が熊を襲う時のような「(動物的)本能」である。つまり、動物的な性質を持つて、鳥というヒエラルキーに属している「よだか」が、その性質をかき消すかのように、正直で、心優しく、穏やかな性質であることが、何よりも、動物のヒエラルキーを飛び越えるに相応しい「質」となり、そして希望を叶えたいと願う純粹な心は、仏に届くものだとすることを賢治が暗示していると考えられるのだ。つまり、賢治は、「よだか」は、爬虫類のような顔をした鳥であり、鳥の中でも鷹に食べられるような低い位置に存在するものであるが、どの階級であれ、全ての生物に向上する可能性があり、仏の光を受けるに相応しいと考えたと解釈できるのである。

「よだかの星」に着手した次の年には、妹のトシ子が結核の症状が悪化し亡くなっている。この童話の校正はトシ子の看病をしている最中に行われたが、この時も賢治は自己の修羅の問題に向かつて

いたと考えられる。つまりトシ子の病状の回復と最悪の場合の死の結果、という切迫した状況と同時進行で、自分が修羅であるから最愛の妹が失われるのかもしれないというような因果関係を感じて、自らを責めることもあつたであろうと考えられるのだ。

結果、トシ子はやはり死に至るが、最後に星になる「よだか」の姿は、トシ子と同じように天へ召されたいと考える賢治の願望であつたと考え得る。賢治の「修羅意識」を念頭に置いてこの作品を読めば、多くの研究者のように、「よだか」を、賢治が自分を投影した姿であると考えられる。しかし最後に星になる「よだか」に、賢治の藻掻きと修羅からの解放の願望がこめられているとも言えるだろう。

見田宗介はこの結末を、賢治の焼身願望とし、このような焼身願望は賢治作品や実践のなかに様々なヴァリエーションを生み落としているが、その生涯をつらぬいて詩人の心象世界の一隅にいつも光を放ちつづけた軸の観念のひとつ」と指摘している^{三十六}。見田のよう

にこの作品を読めば、「よだか」＝賢治ということになり、ここでは賢治が「よだか」に自己の願望を投影したと考えられる。しかし、「よだか」は自己というよりも、弱者の代表のように描かれているとも考えられないであろうか。それは、前述したように、この作品が書かれた時期は、賢治が菩薩行を行っている時期であり、個人の願望達成というよりも、世界全体の幸福の手がかりを模索しているようにも取れるからである。また、賢治がベルクソンの進化論における動物のヒエラルキーの概念になんらかの影響を受けていたとすれば、どうすれば弱者も「種」の集団から進化していくこと

ができるのか、つまり、どのように「個」が「まこと」へ向かえる存在となるのかという命題に直面していたと言えるのだ。結局、賢治は、集団の中の、それぞれの個体のもつ「質」が問題になると考えていたと考えられる。つまり、「よだか」が、ヨタカという動物の「種」が持つ運命を変えたいという志をもつことで、初めて「種」を越え、より高い存在になることができると暗示していると読めるのである。そうであるならば、この物語の中で、賢治は「よだか」を超越（進化）の象徴として描いていると言えるだろう。

このように、この童話で、賢治は「よだか」という、種族の中でも、底辺に位置付けられる主人公を、生存競争の運命に苦しむ弱者のモデルとした。そして、この物語をとおして、エコロジーを超越する仏の力を描いている。この時、賢治の視点は、「生物の進化」という科学的事実に向けられているが、それらの事実、さらに法華経の観念的な理想を重ねていることが、この作品が、他のエコロジカルな童話に比べ、より深遠な意味をもつ作品になっている理由だと言えるだろう。

結論 賢治の理想、「世界ぜんたいの幸福」とエコロジー

童話集『注文の多い料理店』と、その同時期に書かれた「よだかの星」は、「まこと」の希求がどこに向かってなされなければならぬのかという命題に対して、手がかりを自然の中に求めて著された作品である。大正十年のこの時期、賢治は、国柱会の講師、高智尾智耀に勧められて、文筆活動で菩薩行を行おうとしていたのであ

たが、特に同年二月は多作であり、原稿用紙に三千枚ほど書いたと言われている^{三十七}。自然の中の「まこと」のもとでは、どんなに小さな命でも、一瞬の命であつても永遠の輝きとなり、世界の幸福をつくることができると考え、賢治は、童話集『注文の多い料理店』のほとんどをこの時期に書いたのである。またこの頃、賢治は書簡の反古の中で「・・・宇宙には実に多くの意識の段階がありその最終のものはあらゆる迷誤をはなれてあらゆる生物の究竟の幸福にいたらしめようとしてゐる。」^{三十八}と書いている。つまり賢治は、「あらゆる生物」を見る、というエコロジカルな視点で作品を書いていたと言えるだろう。

「よだかの星」では、斎藤文一が指摘しているように、醜いよだかが「世間において非力であり、無価値にして無用、はみ出し、隔てられた世界に置かれ」た修羅だとしても^{三十九}、星になり、仏に近づきたいと願う「よだか」は、法華経の「謗法逆縁」では、その時点で修羅から解放されているのである。窮地の中で逆転を願う姿勢そのものが解放なのであり、この願望が、この物語では重視されている。つまり、「まこと」のもとで、逆転は、どの命にでも起こりうる、という希望がテーマとして扱われていると考え得るのだ。賢治は、単に自分自身のみを「よだか」に投影しておらず、むしろ、このような「弱い」よだかを使って、全ての生物の存在意義を語ろうとしたと考えられる。このような、賢治の弱者に向ける眼差しは、小さきものの声を聴こうとする、より深いエコセントリックな視点であると言えるだろう。

【注記】

- (一) エコクリティシズムという用語自体は、W・リュカート (William Rueckert) が一九七八年に発表した論文 “Literature and Ecology: An Experiment in Ecocriticism” で初めて使用された (Glotfelty, Cheryl and Harold Fromm, eds. *The Ecocriticism Reader: Landmarks in Literary Ecology*, Athens: U of Georgia P, 1996, 105-23)。
- (二) ローレンス・ビュエル 『環境批評の未来—環境危機と文学的想像力』伊藤詔子他訳 音羽書房鶴見書店 二〇〇七年 一四七頁。
- (三) 山里勝己「ネイチャーライティング」『ユリイカ』第二八巻 四号 一九九六年 二二六―七頁。
- (四) 賢治は、パトリック・マーフィー (Patrick D. Murphy) が編纂した *Literature of Nature: An International Sourcebook* (London: Routledge, 1998) において、大正時代のセクションで、自然を書いた代表的な日本の作家として取り上げられている。詳しくは二八五頁を参照されたい。
- (五) 岡田純也『宮沢賢治—人と作品一四』福田清人編 清水書院 一九六六年 四七頁。
- (六) 岡田 四七頁。
- (七) 内田朝雄『私の宮沢賢治—付・政次郎擁護—』 農山漁村文化協会一九八一年 八六頁。
- (八) 萩原昌好『宮沢賢治「修羅」への旅』 朝文社 一九九四年 一〇七―八頁。
- (九) 齊藤文一『宮澤賢治：四次元論の展開』 国文社 一九九一年 一三〇頁。
- (十) 齊藤 一三〇頁。
- (十一) 四経は、釈迦が菩提樹のもとではじめて正覚を成したことをもとにして説かれた経説をいう (齊藤 一三二頁)。法華経を指す妙法には、本門と迹門があるが、絶対不滅の真理である仏陀の本体が本門であるのに対し、人々を救済するための手段として身を現して種々の教えを説いたのが迹門である。法華経二十八品の前半部が、迹門であり、後半が本門である。迹門の観念では仏をあかすことは出来ないが、本門寿量品によって久遠実成の本体があらわれる (齊藤 一三二頁)。
- (十二) 齊藤 一三二頁。
- (十三) 宮沢賢治『宮沢賢治校本全集』 第九巻 筑摩書房 一九九五年 二四二頁。
- (十四) 恩田逸夫「宮沢賢治の文学における『まこと』の意義」『跡見学園国語科紀要』二号 一九九五年 八二―三頁。
- (十五) 宮沢賢治『校本全集』 第五巻一九九四年 一二二頁。
- (十六) 恩田 八二頁。
- (十七) 伊藤光弥『宮沢賢治と植物—植物学で読む賢治の詩と童話』砂書房 一九九八年一四頁。
- (十八) 伊藤 二〇頁。
- (十九)

(二十) 『平成二十五年度 森林・林業白書』林野庁 二〇一三年 二十五頁。

(二十一) 『森林・林業白書』 二十六頁。

(二十二) グレゴリー・ガリー『宮澤賢治とディープエコロジー——見えないもののリアリズム』佐復秀樹訳 平凡社 二〇一四年 一三六頁。

(二十三) ガリー 一三六頁。

(二十四) ガリー 一三九頁。

(二十五) ガリー 一三九頁。

(二十六) 宮沢賢治『校本全集』 第八卷 一九九四年 三一頁。

(二十七) 宮沢賢治『校本全集』 第八卷 三四頁。

(二十八) 宮沢賢治『校本全集』 第八卷 三五頁。

(二十九) 丘浅次郎『進化論講和』 開成館 一九〇四年 一八二頁。

(三十) 「料理店」に登場する山猫が、人間を騙して食べようとするというこのような逆説において、矢野智司は賢治が野性的な世界の活力を表現しようとしていると指摘している(矢野智司「風が贈与する生命の倫理と心象スケッチ」『教育哲学研究』 第九三号 二〇〇六年 一三一頁)。

(三十一) 宮沢賢治『校本全集』 第八卷 一五〇一六頁。

(三十二) 賢治は、詩「春と修羅」の冒頭部分の一行に、「四月の気層のひかりの底をへ睡しへはぎしりゆききするへおれはひとりの修羅なのだ」(『校本全集』 第一巻 一九

九五年 二九頁)と書いているが、ここに賢治の「修羅意識」が明確にあらわされている。自己を修羅に重ねる意識が、賢治の人生観そのものを支配し、作品のほぼ全域に反映されているのである。逆に言えば、修羅を語ることで仏の世界を語るといふ姿勢が賢治の全部の創作に共通している。

(三十三) 大塚常樹『宮沢賢治——心象の宇宙論』 朝文社 一九九三年 一六頁。

(三十四) 宮沢賢治『校本全集』 第五卷 一九九四年 八七頁。

(三十五) 宮沢賢治『校本全集』 第五卷 九〇頁。

(三十六) 見田宗介『宮沢賢治…存在の祭りの中へ』 岩波書店 二〇〇一年 一三八頁。

(三十七) 岡田純也『宮沢賢治——人と作品一四』 清水書院 一九六六年 六六頁。

(三十八) 宮沢賢治『校本宮澤賢治全集』 第一三卷 筑摩書房 一九七七年 四五三頁。

(三十九) 斉藤文一 五四五〇六頁。